蕾のいろ〳〵

京　子

一、かくれんば

萩の植ゑ込みのかげにかくれて、大きな先生のからだをかこんで、にこ〳〵、クス〳〵、しやがんだ子供は皆笑ひ顔をしてゐる。小さいからだを一層ちゞめて、りんごのやうな道ちやんの頰がつや〳〵光つてゐる。それがうつたわけでもあるまいがいつもあほいみどりさんが今日はさえ〳〵してみえる。

と。そばの丸花壇に蝶々を見てゐたてる子さん。とき色の半そでの洋服に簡單な白いエプロンをかけて、かぶきりの少しのびたのを二つに分けて、白いリボンで結んで――何げなしに後をむき、皆のかくれてゐるのを見て、あごが二重になる位首をまげながら、

にこ〳〵して「先生わたくしがかくしてあげませう」

まつしろな靴下の可愛い足を少しひらいて（朝の深呼吸の時にするやうに）兩手をのばして、しやがんでゐる。先生と同じ位な丈をのばし、時々うしろをふりむきながら一生懸命で御衛をして下さつた。バタ〳〵つとおにの足音に、皆一度に先生の胸や袖の下に小さい頭をひそめた。と番をしてゐるてる子さん、大きな聲で、

「一郎さんこゝではありませんよ」

フム……とまた首をまげて笑つて。……

さとい一郎さん少し背のびをして。

「あ、てる子さんのうしろに先生が、五郎さんが

道ちやんが」と

「あゝらみつかつた」とてる子さんはのばした兩手をおろしてお鼻にしはをよせて笑ひながら。

「先生わたくしも入れてちようだいね」と後にとびついて四人の子がつかまつて一つのこつた先生の右の小指を大いそぎでつかまへた。

二、達ちやん

色は黑いけれど、頰は羽二重のやうに柔かで、何か云ふときよく先生の顏にこの頰をすりよせるので、先生はたまらなく可愛くなる子がある。しもぶくれで、ちんまりした口もとや可愛いらしいあご。さがすやうな眉毛は左右にはなれて一寸一筆がきにしたやうだ、ひとへまぶちの茶がちな目はいつはりをしらぬ貴さにかゞやいてゐる。頭の毛がちゞれてゐる。少し長くしてゐる時などは生えぎわの處がクル〳〵とまいて、どうみてもキウピーかビリケンか。お鼻の具合もよく似てゐる。その鼻がまたおもしろいので、いつやら達ちやん、何かのはづみにお友達を小さいげんこでコツン、とした。相憎と氣のよはかつた相手はすぐに泣き出した。「君失敬ね」といつたがだまらない。その時達ちんの顏。そばに來た先生を見上げて「先生(シエンシエイ)僕がぶつたら泣いちまつたんです」それだけいふ間に、いつぱいになつてゐる目からはボロ〳〵と涙がをちる。「ぶつのは達ちやんがいけませんね」といつてゐると、達ちやんの鼻から圓い提灯がプッと出て又ひつこんだ。二度ばかりする中に小さい下唇が少し出る、八の字がよる、まるくふとつた腕を顏にあてゝ破裂してしまつたまで。

當然しかられるべき理由が達ちやんの方にあつた此の場合、出たり、引込んだりするお提灯のおかしさをこらへるのに先生はずゐぶんな努力をした。「達ちやんの顏を見ると、自分でも惡かつたと思つて居るから、氣の毒やらおかしいやらで、何もいへなくなるのですもの」と子供達の歸つたあ

とで保姆は話してゐる。

達ちやんは割合に遠い道を二つ違ひの兄さんとよく歩いて通つた。ある雨の日、例の通り二人で來た。みると、こまげた（これは少しよごれてもころばぬやうにとの母様の御考案らしい）に小さいから傘、それが丈の低い達ちやんにはやつばし傘のあるくやうにみえる。帶から足まで、後の方をすつかりぬらしてしまつた。兄さんの方はさほどでもないが達ちやんはあんまりしめつてゐるから身體にさわるといけないと着物をぬがせて乾かした。その間そなへつけの赤い長襦袢をきせた、ゆきがながくて、小さい手々がやつと出る位。帶も濕つたので、ネルのお腹まきを代りにしめさせ座ぶとんの上にキチンと座らせた樣子はまるで小さい達摩さま。あそびたいのをがまんして、乾くまでぢつとしてゐたのは悧口な達ちやんが「やあ、おかしいな」といふ友達の言葉を豫期してゐたためであつた。友達といふ自分と同等のもの丶言葉は子供にとつては大そう力のあるものである。達ちやんがまだ入園したての事であつた。ちゞれてゐるせいでか髮の毛を少しのばしてあつた。すると一人の子が、他の友達に、「君、この方女だね、髮が長いもの」と云つた。

それをきいてゐる達ちやん、早速、お家にかへつて「ママちやん、僕を兄さんと同じにして頂戴僕、女だつていはれるんだもの、もつと短くしてね」とせがんださうだ。

手技の説明の時など、お行儀よくしてといふと口をきつくむすんで、兩手を後にして、胸をつき出して、首をあげてりきむ。達ちやんはまことにすなほな子だ。

三、たき子さん

みどりの地に、とき色の櫻と緋のもみぢ、かすみを白い線で出したメリンス友禪がいかにも春らしい。あまり大きくない元祿にした袖口と裾とに

は紅のもえるやうなのがたださへ色白のたき子さんを一層美しく、黒々としたかぶきりがまるで人形のやうだ。それでもたき子さんの細い眉の間には子供に似あはぬ淋しさがある。

入園の時、何かのことで、お父様の事をうかゞた時、「はい。この父は……」とおつしやつたきり、たき子さんの母様はあとを續けることが出來ずにいらしつた。なぜあんなことを伺つたのかと、あとでほんとうにすまなく思つた。あの若々しい、美しい母様は御良人にお別になつて、まだ半年もたゝずにいらしつた。

たき子さんには父様がないのだ。

一日二日はよく遊んだのに、三日あたりから少しはにかみ出した。たき子さんは、今朝も二日月のやうな眉の下をまつ赤にはらして來た。

「たき子さんは姉様だつたのね、誠さんや正さんにまけますよ。さあ、がまんして、良い姉様になりませうね」

勵まさうとする聲を氣にもとめず「なかや、なかや」と女中にしがみついてはなれない。

だまつて様子をみてゐる先生は一寸庭をみて、

「あ、たき子さん、あそこに櫻んぼうが落ちてゐますよ。皆さんが拾つていらつしやる、たき子さんも拾ひに行きませう」と云つた。

「櫻んぼう」といふことに引きつけられて、思はずたき子さんは先生の手をひいた。そして名は知らないが昨日も一昨日も一處のお室で遊んだお友達のゐる庭へ下りた。

上のぞうりと下のおぞうりとをはきかへて居るその間に丈の高い先生は、下では小さいたきちやんの手をひきながら上の方で、目で「なかや」に何か話していらつしやるのを、たき子さんは少しも氣づかなかつた、先生は安心した。なかやは見えないやうに急いで玄關の方へ出た。庭に出るとやさしい姉様や兄様達は。

「君、これあげませう」「わたくしのも」

と、まつげに露のあとのあるたき子さんをいたはつて、大さわぎして自分の見つけた櫻んぼうをも持て來て、小さい手にぎらせた。たきちやんの眉の下のはれがだん〳〵ひいてさえ〳〵した顏になつた時、丁度足元に落ちてゐた、まつ赤な櫻んぼうを自分で「あつた」と云つてひろいあげて、思はず笑顏をみせた。

「まあい丶のだこと。よく見つけましたね」これだけの言葉に現しつくせぬよろこびはこの時の先生の顏にかゞやいてゐた。おそらくこのよろこびは物質や名譽の何ものにも比べられなかつたらう

先生、といつも手につかまつてゐる道ちやんが(たきちやんに手がかゝるから、どうしたかしらと思ひながら、すて丶置いたら)砂場へ行つて、一人でせつせと砂のおだんごを作つてもつて來た。

「まあ、道子さん、大そうおいしさうなお團子が出來ましたね。ぢや、も一つ、たき子さんにも、こしらへてあげて頂戴な。」

道ちやんは口もとに可愛らしい笑くぼをみせてまた砂場にとんで行た。少し元氣の出て來たたき子さんの樣子をぢつとみてゐた先生はよいものをみつけたやうに云た。

「あの、たき子さんも、道ちやんのお手傳しませう、先生もこしらへますよ、大きいのを」

たきちやんは先生の手につかまつて、だまつてがつてん〳〵をして、小足に砂場の方へ行つた。

その內に、あつちからも、こつちからも、お團子の御進物や、御手製のお供へがたくさん出來た。よし子さんのは木でくつたお釜を型につかつてこしらへた格好のよい、おまんぢうだつた。このお釜がたき子さんはほしくてたまらないらしかつた。それはどの型をわたしてもわたしても、首をふつた、そして「何がほしいの」ときいたら、だまつてよし子さんの手を指した。

きむづかしい芳子さんの氣象を知つてゐた先生は、どうかと思つたが、まづ芳子さんをよくわか

つた姉様にしてしまつて、
「よし子さんは姉様なのね、この小さい方に一寸お釜をかしてあげて頂戴、ぢきお返ししますよ」
變り者のよし子さんは口をきかなかつたが、快く肯いてお釜を持てきた。
「よし子さん、どうもありがたうございます」笑ひながら云た先生は心からこのお禮を云つたのだつた。
その中にあつちからもこつちからも、御進物や賣買や、またお手製やらで、お砂のお團子がたくさん出來た。
と向から繪にある金太郎さんのやうに二重あごのニコ〳〵した明さんが「四の級おは入り」と大きな聲でよびに來た。今まで使つて居た小さいバケツも、ふるびも、しやもじもなげ出して、バタ〳〵つとかけ出さうとするのを「よい子は使つたおもちやをかたづけるのでしたね」と先生の言葉のまゝに、すぐになほしに來た五郎さん、秀ちやん。やんちやんな成ちやん達はそんな子に見むきもしないでかけて行つたが、友達の彦ちやんに「君、あら〳〵、惡いぜ」と一目にらまれて、皆大急ぎて戻つて來て、せつせと片づけた。庭の草履をしまつて、上草履をはいて室に入て腰をかけるまでは可成の時を費した。オルガンの音でおじぎがすむと、こんどは「お名前呼び。」
上ぞうりをはく時に「なかやは〳〵」と云つたたき子さんの目はもう涙で一ぱいだつた。「なかやはね、たきちやんがお土產作しらへていらしやると來ますよ」と云はれて、やつとだまり先生の手にしつかりすがりついて室には入た。
「今日はたき子さん、先生がびつくりなさるやうな大きい、お聲でお返事しませうね」とそばについて腰がけた見習保姆はかう云てはげました。たきちやんはだまつてがつてん〳〵をした。氣の弱いはにかみやのたきちやんはどこかにまた負けぬ氣の處があつたから、小さい胸に生れてはじめて

位の決心をしたのでせう。

「紅林たき子さん」と呼ばれた時「ハイ」と大きい聲で返事をするかしないか傍に居た保姆にきゆつとしがみついて顔をかくした。この時はりつめてゐたたき子さんは急によはいたきちやんに返つたのだ。そして居ても立てもたまらぬほどきまりがわるかつたのだ。

「お上手でしたぬ」とだけ云つた先生の心には「お、強いお子。よく云へた。よい子であつた」と抱きあげてでも小さい胸の努力をみとめて、むくひてやりたかつた。

紫の摺紙でこしらへたふとんを「とき色の菊の花でとめて頂戴」と云つたのもたきちやんらしい要求だつた。

おみやげがすんで皆遊戯室にあつまつて、歌をうたひ「さよなら」の御挨拶をして玄關に出た時、多ぜいのおむかひの中で、上り段に一番近くに「なかや」の居たのをみてたきちやんは元氣よく「先生、御機嫌よう」と云つた。

○お伽通信社

多年主として敎育的お伽噺(論語お伽噺、格言お伽噺、御製お伽噺、お伽十二德、敎訓夜噺、修身文庫お伽一學年よりお伽六學年、バイブルお伽噺、讃美歌お伽噺等)の著作に從事し來りし藤川淡水氏は一つは幼稚園兒童に對し健實にして趣味に富めるお伽噺を與へ、一つは保姆諸氏に向つてお伽話材を提供するの目的を以て、幼稚園向きのお伽噺創作に從事し、來る十一月一日より左記の條件を以て弘く之を諸園に提供する由なり。

一、發信數　一ヶ月新作お伽噺二十篇

一、發信日　一日。八日。十五日。二十三日。

(毎回五篇宛を一括して發信す)

一、通信料金　一ヶ月金七十錢(郵税共)

尙ほ同通信には毎月二回づゝ附錄として竹貫佳水氏の「お話の仕方の研究」(つゝきもの)を添附すべしと。同通信希望の向は東京市外巢鴨村宮仲、お伽通信社藤川淡水氏宛に申込まるべしとなり。